

豊公謡曲

北条

シテ 北条氏政の霊

ワキ 五山の僧

所 相模小田原

時 秋

ワキ詞

「是は五山の傍に住居する僧にて候。我小学の年よりも。内典外典に心をかけ候ひしを。近年撥草参玄のために西国行脚仕り候。又当年は東国へと志し候。

サシ

「花洛を出で、逢坂の。山の東に鳩の海。胆吹風に荒れ残る。不破の関屋も跡に又。鳴海の浦を打ち過ぎて。三河の国の八橋や。

上歌

「猶行末は遠江。く。駿河の富士を北に見て。伊

詞

「急ぐ道とはいひながら。大山を越え候へば早暮れ

原近くたどりけり。く。

豆の三島を伏し拝み。足柄箱根越え暮れて。小田

に及び候。人に宿を借るまでもなし。是なる辻堂に一夜を明さうずるにて候。幽思極まらず。深巷に人なき处。愁腸絶えんとす。

カ、ル

「閑窓に月ある時。稀に知る夜半も悲しき松風を。絶えずや苔の下道に。聞くらん人の古へを。思ひ

やるこそあはれなれ。

シテ詞

「なふく御僧は何くの人にてましませば。程近からん人家をば尋ね給はで。此草深き松陰に。露の宿りをしめ給ふぞ。

ワキ詞

「是は捨身の事なれば。樹下石上の住居こそおのづからなる座禅の床なれ。何か此身に厭ふべき。

シテ詞

「げにも捨身の御僧の。心の内こそ奇特なれ。さもおろかなる身の上に。真如実相参得の。教を示し

給へとよ。

ワキカゝル

「もとより心外無別法。満目青山これこそは。教の外に伝へなれ。

シテ

「いざさらば立ち寄りて。

ワキ

「猶参学を。

シテ

「極めんと。

地

「岩がねの苔の緑を片敷の。く。袖の白露こぼれそひ。一むら薄ほのぐと。月落ちかゝる山の端に。

秋風吹きて虫の音を。誘ふは萩の上葉かな。く。

ワキ詞

「如何に尉殿。此国は北条家年久しく守護し給ひし
処と承り及びて候。北条の氏政父子果て給ひし由
来を語つて御聞かせ候へ。」

シテ詞

「心得申し候。念頃に御物語申さうずるにて候。」

クリ地

「さても当家は先祖より。東の方を残らずも。従へ
来つゝあたりには。恐れをなさぬ人もなく。心に
まかせ居たりしに。」

シテサシ

「秀吉公は日本の。世の政あづかりて。靡かぬ草木
もなかりけり。」

シテ

「氏政も此度は。都に登り礼讓を。なし申さんと定
めしを。家中の者にいひなされ。又上洛を違変す
る。」

クセ

「然れば都には。此由聞し召されつゝ。相国大に逆
鱗の。書状を下し氏政が。父子の頭を刎ん事。
踵を廻らすべからずと。書きとゞめけん言の葉に。」

無念を起し反逆の。色を顕はしにら山や。猶山中を固とし。足柄箱根の切所には。乱杭逆茂木柵を築き。たとひ大軍寄するとも。ゆめく叶ふべからずと。思ひ定めし半天の。雲を嵐の吹く如く。敵の人数に襲はれて。はかなくなりし氏政が。運の極まる処なり。

シテ「つらく之を案ずるに。

地「昔周の代息侯は。鄭の莊公に。約を違へて戦ひし

に。息の軍は破れつゝ。息侯滅びける事は。随ふべきに随はず。力も絶えて偽の。報いところそは聞えけれ。北条も其如く。正理にそむく天命は。後にぞ思ひ知られたる。

ロンギ地

「げに老人の夜もすがら。く。古事語り聞きしより。故ある人と覚えたり。其名顕はし給へかし。

シテ

「我はもとより埋木の朽ち果てたりし身なれども。夢にまみえて御僧の。教を頼むばかりなり。

地 「身は朽ち果てゝ跡にしも。名は残りつゝ武士の。

シテ 「八十氏人の氏政が。

地 「幽霊なれや。

シテ 「今こゝに。

地 「忍ぶとすれど名取川。顕れ渡る埋木の。はかなき

水のあはれ世の。面影消えて失せにけり。く。

ワキ歌 「麻衣草の苔路の露の世に。く。不測不説の理り

も。妙なる文字の跡見する。水鳥樹林おのづから。

声法事をやなしぬらん。く。

後ジテ

「周孔盗跖塵の世の。迷悟善惡諸共に。如夢幻泡影

如露亦如電。応作如是觀。

詞

「さて御僧の示し給ふ。禅法猶も参得の。志にて再来を。いかでか咎め給ふべき。

ワキ

「さては氏政の幽霊夢幻に来れるかや。さらば過ぎこし秋の夜の。最期を顕はし見せ給へ。

シテ詞

「お僧の仰に叛かじと。語るにつけて無念さの。数

も限りもなかりけり。既に官軍寄せくれば。彼山中の固めには。我身に変わぬ一類の。兵撰び入れ置きて。こゝを先途と待ちかけしに。

地

「近江の国の中納言秀次の卿。此度の先陣を望み。險難の谷峰いはず攻め登れば。味方の兵ふせぎ矢射る矢下にかゝりて。堀をば飛び越えいかきはね越え。秀次真先かけ給ひ。向ふ者をば切て捨て。逃ぐるを追ひ掛け残さず亡ぼし給ひけり。相国城

に入り給ひ。如何に秀次いしくも励ます戦功かな。此軍忠の恩恵に。世の政譲らんと。かたく契約ましませば。秀次の卿拝請し。名をも雲井に揚げ給ふ。其時相国は。勢ひに依つて破れとの。其先言に任せつゝ。今度は相国先掛にて。此小田原に攻め寄する。切つて出でんと思ひしに。同名なりし陸奥守。諫めて曰く此城を。離れて打ち出で給ふならば。雑兵の手にかゝりつゝ。必ず不覚あるべし。

我介錯を申さんと。涙を流し申せしを。

シテ
「尤と同心し。」

地
「尤と同心し。自害をせんと剣を抜き。弓手へ指し立て馬手へ引く。うしろより陸奥守。首打ち落し我も又。腹切り果てし事こそは。比類もあらぬ心なれ。是より相国は。関八州従へ。陸奥まで御動座にて。蝦夷が千島に至るまで。心のまゝに治め置き。還御なるこそ奇特なれ。我もお僧の教化

にて。現成脱体本分の。道に入りぬる嬉しさよ。
く。